

Case Studies_2

追手門学院大学



学長 真銅正宏 氏

「OIDAI WIL」と「OIDAI MATCH」で自分なりの問いを立て、解決する力と主体性を伸ばす

学生の主体的な学びを実現するために、独自の学修スタイル「OIDAI WIL」と、ICT活用をはじめ教育効果を最大化するための教育手法「OIDAI MATCH」を整備し、供給者本位の教育から学修者本位の教育への転換を図っている追手門学院大学(以下、追大)。その狙いと詳細について、真銅正宏学長と大学政策部部長の高本優一氏にお話を伺った。

主体的に学び、協働して問題解決にあたる「WILプログラム」で問題発見・解決力を伸ばす

追大が実践する、主体的な学びを実現する取り組みとして、アカデミック・アドバイザー制度と追大独自の学修スタイル「OIDAI WIL」が挙げられる。

アカデミック・アドバイザー制度は、1年次から卒業まで、全学部において学生20人程度ずつでクラスを作り、教員1名がアカデミック・アドバイザーとして相談に乗る仕組みだ。そして、「OIDAI WIL (Work-Is-Learning)」は、主

体的に学び、協働して問題解決にあたる追大独自の学修スタイルとして、所定の要件・条件に当てはまる授業や課外活動を「WILプログラム」として登録・認定し、学生達の積極的な参加を促す取り組みだ。いずれも「研究テーマを見つけるのに、ゼミに入る3・4年生から始めるのでは遅い。低年次からゼミのような少人数で教員や学生と話しながらテーマを見つける取り組みを、全学で行いたい」という真銅学長の思いが込められた取り組みだ。

「OIDAI WIL」について、真銅学長は「大教室で得た知識を実社会で運用していくには、自ら見つけたテーマに対して知識を応用・活用する力が必要」とも説明する。WILプログラムに登録・認定されているのは、2021年4月時点で正課科目44科目と、インターンシップ等の課外活動、あわせて100以上。「テーマを見つけるためのフックとして、大学が用意した勉強の仕方の例示集としても活用してほし

い」と期待を寄せる。

教育DXにより、学生の主体的な学びをさらに後押しする

そして、学生の主体的な学びを促す仕組みとしてもう1つ追大が注力しているのが、ICTを含めたあらゆる手法を駆使し、教育内容に合わせた教育効果を最大化する一連の取り組み「OIDAI MATCH (MAXimized-TeaCHing)」だ。1人1台のノートパソコンの必携、学修ポートフォリオ「追大e-Navi」の整備、105分授業×13週の学年暦への変更、授業ごとの到達度確認の仕組みの構築等を進めてきた。

そして今、取り組みの中心となっているのが、学生の学びに関するデータの取得・活用をはじめとした教育DXだという。「学生達が、自身の学習状況や自分に合うテーマを探すための観点を把握するために、できるだけ複数の情報から判断できる枠組みを作ろうとしている」(真銅学長)。具体的には、グループディスカッション時の個々人の発言量や発言のタイミング等を定量的に測定する機器の試験導入、データの自動収集ができるLMSシステムへの変更、AIがデータを読み取り学生にアドバイスを行う「AIティーチング・アシスタント・システム」の構築を進めている。

「追大に行けば身につけられる力」を全学で保証する

経済合理性の観点から、学修者本位の教育や教育の個別最適化に二の足を踏む大学も少なくない。そんな中、追大が信念を持ってこれらに取り組むのは、「学生への付加価値を最大化することが、大学経営にも返ってくる」という考えから。真銅学長は、「大学が適切な教育をしなければ、いくら入試広報が頑張っても良い学生が入ってきてもがっかりされるだけ。また、教育内容が身につけていない学生を社会

に送り出すことも、大学としてあってはならないこと。追大に来れば、テーマを見つける力と、見つけたテーマに取り組み、課題解決に至るための方法を身につけられるということ、全学で保証したい」と力を込める。データ活用をはじめとした教育のDXやIRの強化もその一環だ。

加えて、「最大かつ喫緊の課題」と真銅学長が力を込めるのが、理系学部の新設だ。「『文系』『理系』といった枠組みを超えた新しい時代の複合的な社会にどのように対応できるかが、現在の大学全体のテーマ。そして、これまでにない発想や気づきができて、それを自分で深掘りできる人材を育てていくことが大学の使命と考えている。そのために、文系学部中心で構成されている本学においては、理系学部を設けて、各学部が連携しながら文理の枠組みを超えた学びを展開したい」と意気込む。

その一つのメルクマールとなるのが、2025年4月に予定している茨木総持寺キャンパス(大阪府茨木市)の拠点化だ。学部増設および理系学部開設構想などに合わせ、新校舎を建設して大半の学部・大学院及び本部機能を集約する。「新校舎は、文理を超えた発想につながるような自由で創造的な教育を展開できる建物にしたい。そうして、2025年にキャンパスと理系学部ができ、教育DXもある程度の形を見せるところまで走り切りたい」と真銅学長。事務方として改革の指揮をとる高本氏も、「教育DXやIR強化の方向性は2025年度とはいわずに2022年度中に何らかの形にしたい」と意気込む。社会の動きに応じて新しい教育を形づくり、必要な学部・キャンパスを整備するという動きを短期間で進める追大のスピード感は随一のもの。今後の進化に期待が膨らむ。

(文/浅田夕香)

図1 OIDAI WIL の概念図



- < WILプログラムの3要件 >
- ・社会有為：世のため人のために誠意を持って尽くし、今の社会とこれからの社会における答えのない問いに臨むものである
 - ・協働性：多様な人々と手を携え、知恵を出し合い、議論を尽くして、答えのない問いに対する最適解を導きだすことに挑むものである
 - ・発信性：教室を出て、世代を超え、地域を超えて、既成概念を超えての発信に挑むものである
- < 認定の4条件 >
- ・原則 30 時間以上の活動
 - ・教職員による指導がある
 - ・活動の記録は追大 e-Navi へ
 - ・アセスメントやアンケートを行う

図2 OIDAI MATCH の概念図

